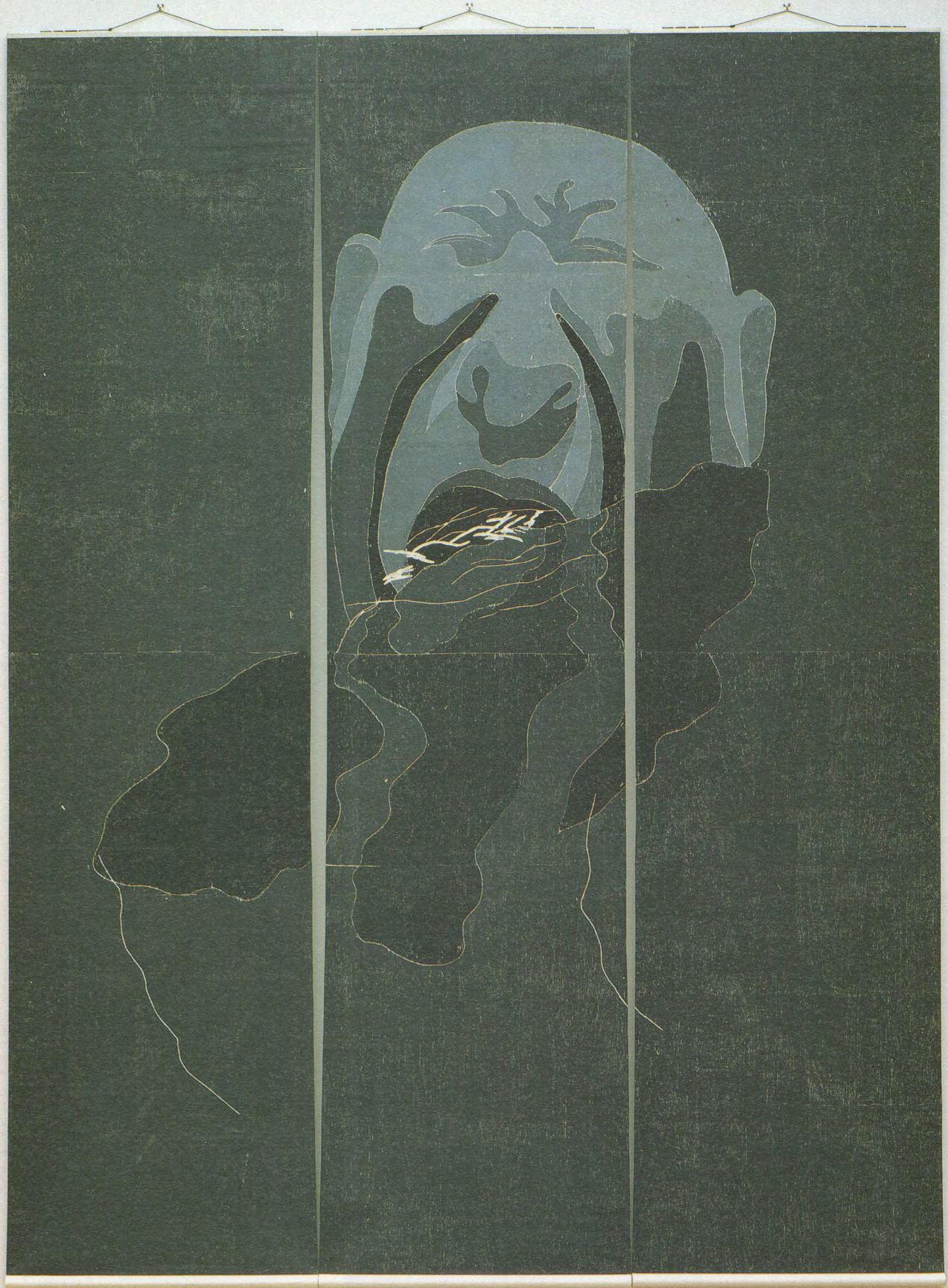
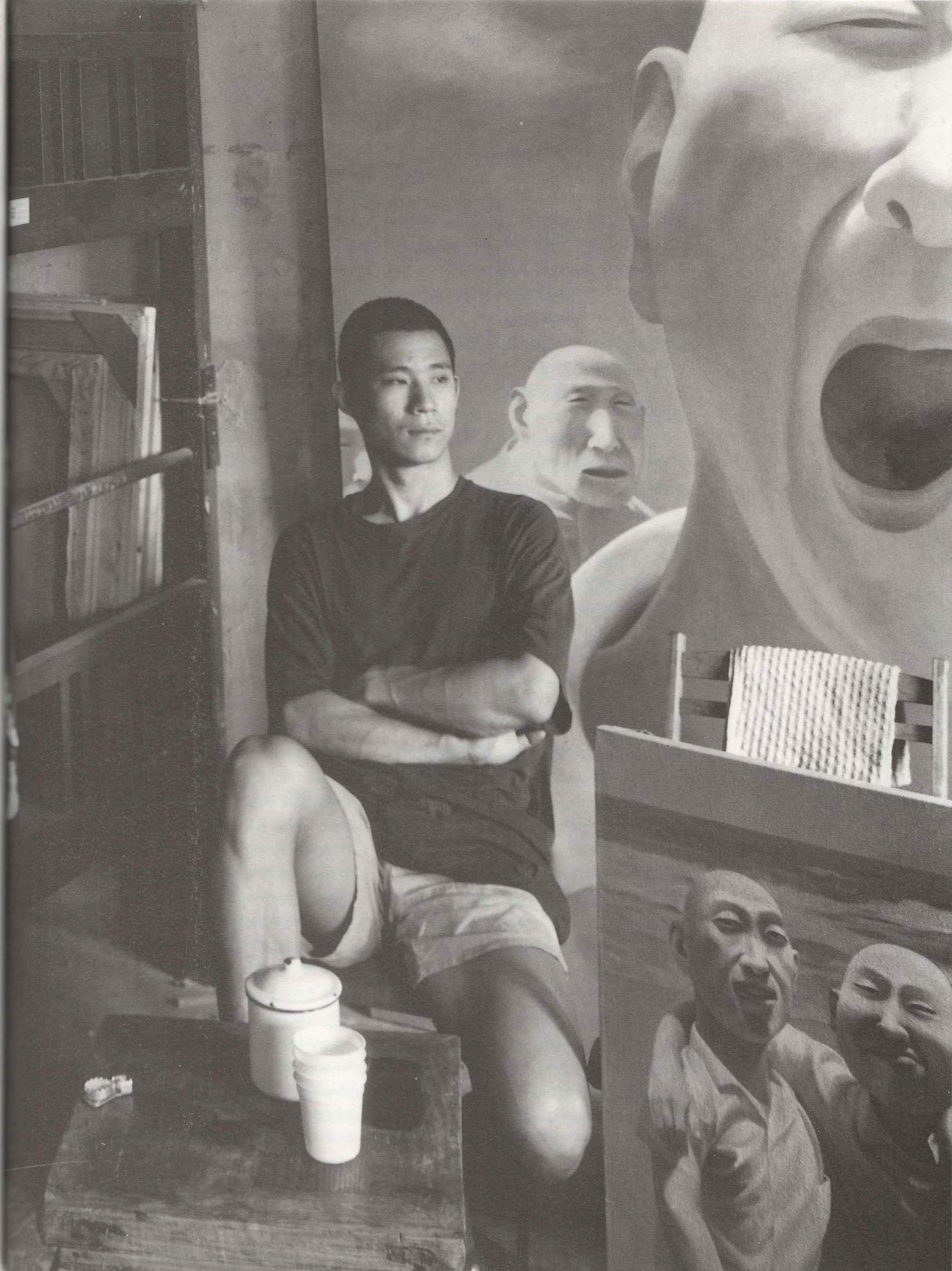


45——1996 版画 No.1 1996年 木版・インク、画仙紙 488×366cm(3枚組) 作家蔵  
*1996 Print No.1* 1996 woodcut, ink on Chinese paper 488×366cm (3 pieces) artist







## 思い出すこと

### 方力鈞

記憶の糸をどこまでもたぐりよせると、決まってある一つの情景にたどり着く。出勤しようとする母に、泣きじゃくりながら追いつがる幼い私。すると祖母が飴玉が何かを見せながら私の気をそらせ、その隙に母がさっと自転車に飛び乗って工場へ走っていく。そんな情景である。

父はよく、自分が鉄道専門学校の同窓生のうち一番早く幹部に抜擢されたことを自慢していたが、私がおものごころついた頃には、すでに出身階級に問題があったため、ただの電車運転士になっていた。

ほどなくして、資本家や地主、国民党の残党、反革命分子らが次々と引立てられるようになり、批判大会が開かれることも次第に多くなってきた。物を知らない子供の私は、大人たちにくっついて大声で政治スローガンを叫び、いつも大張り切りで批判大会に参加していた。ある日、いつものように大人たちの後に続いて誰かを批判するスローガンを叫んでいた私は、祖父が無理やり台上に立たされるのを見た。祖父は「方<sup>フアン</sup>地主」と書かれたプレートを首から下げている。まわりの大人たちは、ひたすら憎悪に満ちた怒号をあげ、高々と振りあげた拳を私の頭上でぶんぶん振り回していた。私は穴があったら入りたかった。そのとき自分が何を考えたかは覚えていない。ただ私は、こんな祖父をもったために自分の身の置きどころがなくなってしまったと感じて、ひたすら恐ろしかった。たしかに祖父は善良な人で、私も祖父が大好きだったし、祖父が「富農」という階級の出身だということはもともとわかってはいたけれども。

それまでの暮らしは音をたてて崩れていった。私の家の北側の塀には、私の背よりも高いところに「打倒方地主(方地主を打倒せよ)」と書かれ、貧しい家に生まれた大勢の子供たちが群れをなして「方地主を打倒せよ」と日がな叫び声をあげるようになった。我が家の裏窓は、貧しい階級の人々が階級的憎悪を吐き出すはけ口となり、絶えず誰かがドンドンと叩いているのだった。

父はもともと投稿した詩や散文が新聞に載るのを楽しみにするような人だったが、それからとはかく行動に気を遣うようになった。家族みんなで可愛がっていた熱帯魚をこっそり処分したのも父だった。ある大雨の日、父は一番大切にしていた手の平より大きなトカゲエソをこっそり持ち出していった。父がその仕事を終えると、かつてはあんなにもきらめく生命をたたえていた金魚鉢も、その寒々とした白さが目にしみるだけになってしまった。

近所の貧しい階級の人たちは、我が家の贅沢品を暴き出

してやると公言して、何度も家捜しに来るようになった。だが別の隣人は、家捜しが行われるたびに、親切にも私をかまきま守ってくれたのだった。

階級闘争の進展とともに、暴力による闘争も激しさを増していった。それは、お互いがそれぞれの主義を振りかざして、お互いを殺し合うことにまでエスカレートしていった。そうした戦闘の銃声を子供に聞かせないように、どこかの母親たちも、毎晩子供をひしと抱き寄せてベッドに身を潜めていた時期さえあったのだ。

苛酷な闘争の中で、子供たちは相手の弱点をすばやく見つける能力を身につけるようになった。私のまわりの子供たちは、私の致命的な弱点、つまり彼らの切り札が何であるかを知るようになった。それは私の祖父が「地主」だということだった。初めは彼らも時折、それと気付かずにその切り札を使っていたのだが、そのうちすぐに私のポジションは固まってしまい、どんなゲームであれ私が勝つことはなくなったばかりか、対等な対戦相手さえなくなってしまった。たとえそれまで楽しく仲良く遊んでいたとしても、私はいつ誰かの気まぐれで突如いじめの対象になるか知れない存在だった。彼らがたまたまゲームに誘ってくれることがあっても、それは私をからかって遊ぶためであることもしばしばだった。

そんな私を家に引き止めておくために、父は電車運転士の機会を利用して、らくがき帳と、太くて四角い芯の鉛筆を買ってきてくれた。当時それが物珍しくて、私は家で絵を描くようになった。父の目論見は当たったのである。その後も私は、友達に仲良くしてもらいたくてよく外に遊びに出かけはしたが、それでも新しいらくがき帳と鉛筆を買ってもらいたくて、一定の時間をらくがき帳と一緒に過ごしたのだった。

こうして私は、いつの間にか、しかし自ら望んだわけではなく、絵を描くことを覚えたのである。そのうち私は父の紹介で、労働組合で宣伝活動を担当していた曹振環先生に絵を習うようになった。とはいえ、曹先生の絵は実はあまり巧みなかったのだが。とにかく、それからというもの、絵を巧く描けるようになって労働組合で宣伝活動をするのが私の長い間の夢となった。その上私は20歳過ぎまで、労働組合は共産党の宣伝機関だと信じ込んでいた。

当時、革命模範劇「紅灯記」の登場人物、李玉和を描いた1枚のイラストを手に入れたことがどんなに嬉しかったか、労働組合の部屋に自由に入出入りできることがどれほど得意だったか、私は今でも鮮明に覚えている。

そんな頃だった。階級闘争と批判大会から逃れるために、祖父は私を連れての逃避行を執行したのである。汽車を降りた祖父と私は、遠い親戚の叔父の家にかくまわれた。夜になると私は夢の中から揺り起こされ、腿から足先まで布でぐるぐる巻きにされ、祖父と一緒に口バの引く荷車の中の寝床にそつともぐりこんだ。まわりは北方らしく見渡す限りの雪原と化し、冷たい風が肌をさし、銀色の月の光が一面に冴え冴

えと照り返っていた。こうして私たちは、祖父の故郷である豊南県輝陀村に落ち延びたのだった。

そこで私は夢のような日々を過ごした。私は祖父についてさまざまな農作業をこなし、友達といろいろなゲームをして遊んだ。祖父の方はそれからまじめに政治学習をしていたが、私にとって階級闘争の存在は遠い過去のものとなった。

やがて小学校に上がる年になり、私は邯鄲に呼び戻された。豊南県で覚えた唐山方言を操りながら、大喜びで両親のもとへ帰ってきた私を待っていたのは、相も変わらぬ元の生活の繰り返しだった。壁に書かれた「方地主を打倒せよ」という文字は幾度も書き直され、太く真新しくなっていた。「方地主を打倒せよ」というスローガンを叫ぶ声は、相変わらず朝から晩まで響きわたっていた。

まもなく私は小学校に入学し、学校で「教育」されることになった。それが、父が私に受けさせたいと望んでいた教育だったのか、私にはわからないのだが。

学校で先生に与えられた「批判」というテーマの作文を書くことは、私にはたいへんな難題だった。搾取階級を批判すること自体はそれほど難しいことではなかったが、私には祖父を搾取階級から切り離して考えることはできなかった。生活のあらゆる場面で、私は祖父のみならず、その孫である自分もまた搾取階級の一員であることを思い知らされた。父は私を陰で支えてくれた。学校で出された作文の宿題のほとんどは父が書いてくれたものだ。おかげで作文はクラスでトップクラスの成績になった。先生はよく私を指名して階級批判のための演説原稿を書かせた。もちろん私が台上に上がってそれを朗読することはなかった。私は自分の演説原稿の中で批判されている階級の一員だったからである。

批判大会は続き、その規模は拡大していった。クラス、学年、学校単位で数日から数週間にもおよび批判大会がたびたび行われるようになった。体育委員だった楊華建を批判する大会も、そうした無数の批判大会の一つだった。最初のうちは、クラス単位で授業をとりやめて批判大会を開いていた。楊を批判する作文を書くことが唯一の課題になり、それを楊本人の目の前で読み上げ、教室の壁中に貼り出した。そのうち批判大会は格上げになった。学年全体で楊批判を展開することになり、他のクラスの授業もとりやめになった。ある批判大会が終わった後で、楊は一番うしろの席にぼつねんと座っていた。生徒たちはみな運動場にゲームをしに行ってしまうていたが、いつもならそのゲームの標的は楊になるはずだった。私は辺りを見回して人がいないのを確かめると、勇気をふりしぼって楊に近付き、その肩をポンとたたいて彼を励ましてやったのだった。数年後、みんなで集まったときにこの話をすると、実に半数以上が自分こそが最初に楊を励ましたと思っていたのである。

批判大会は子供の心を容赦なく痛めつけるものだ。若く美しい父先生は、手中にしたこの武器の威力を知ると、ため

らうことなくこれを行使した。たとえば私が遅刻したり、授業中に教室の外で麻雀をしていたと友達が告げ口でもしようものなら、先生はすぐさま授業をとりやめ、3、4時限、あるいは1、2日まるまるかけて批判大会を行い、クラス中の子供たちに私を批判させた。

そんなある日、先生たちは勢い余ってまずい相手を批判大会にかけてしまった。先生は他の生徒に対するのと同じように李愛国を批判する大会を開いた。先生が勝利を確信して、李の首根っこを掴みながら生徒たちに李を攻撃するようけしかけたとき、李はいきなり身を翻して、先生の白魚のような指をがぶりと噛み、窓を飛び越えて逃げ出してしまった。李は貧農階級の出身だった。数日後、貧農の両親が李を連れて学校に押し掛けてきて、この事件はそれきりになったのである。

ある休み時間のこと、友達が手にしていた新聞に、どこかの国の閣僚が中国を来訪した際の写真が載っていた。「その人、毛主席に似てるなあ」と、私は何の気なしに言った。すると、クラスの一団がどどと私を取り囲んで壁際に追い詰め、私の顔を手で突ついたり、「反革命」と叫んだり、中には顔に唾を吐きかける者もあった。

その頃には私も沈黙することを学び、両親には外でどんな目にあっても全然気にしていないと言っておくことを覚えていた。私は誰にも自分の気持ちを打ち明けなかったし、涙を見せることもなかった。だから、それから20年ほど経ったある日、食事に招いた客に向かって、私を辛い目にあわせずにすんだと満足気に語って聞かせた父は、その数日後、少年の日の断片的な記憶を綴った私のノートを見つけて、思わず落涙したのである。

「林彪が死んだ」。父がそう祖父に耳打ちしたとき、祖父の目には緊張と恐怖の色がよぎった。祖父は私に一瞥をくれたかと思うと、父を見据えて「めったなことを言うもんじゃない」と警告した。これが私に対する警告でもあることを、私はすぐに理解した。

瞬間に批林批孔運動の波が押し寄せた。作文の成績が良かった私は学校の文芸班の一員に選ばれていた。私は「孔子は大馬鹿者」と題したショート・ストーリーを書いて発表した。ある田舎の少年が軽石を池に投げ込んだが、すぐに水面に浮かび上がった。孔子はこの問題にお手上げで、その理由を答えることができなかった。そこで私は孔子は大馬鹿者だと結論した。ときどき私は自分でも相当悪賢い人間だと思う。ろくに漢字も書けないうちから、大胆にも先賢をつかまえて辱めることを覚えていたのだ。それでもとにかく私は賞賛された。このストーリーは大いに受けて、学校の批判大会や、幼稚園や、駅の待合室などで繰り返し劇にして上演され、また低学年の文芸班の上演演目として受け継がれていた。

劉茂明は、私と同じいじめられっ子だった。彼は幼くして

母親を亡くしていた。子供たちは、私を「方地主を打倒せよ」と言っていじめるのと同じように、劉を小突いて「母ちゃん死んでざまあ見ろ」と言ってからかうのだった。こうして私たち二人は自然と仲良くなった。他の子供たちの目を忍んで、私たちは二人きりで遊ぶのを好んだ。ときどき喧嘩をして、お互いに「方地主を打倒せよ」、「母ちゃん死んでざまあ見ろ」と罵り合うことがあったが、そんなとき二人はお互いの胸と目の中に、言い知れぬ悲しみがいっぱい広がるのを感じたのだ。私たちは二人とも独りぼっちな辛さを舐めていたから、相手の身を切られるような傷みが手にとるようにわかったのである。その後もこうした罵り合いは何度もあったが、私たちはずっと親友同士で、相手の言った悪口を根にもつことはなかった。何年かして、「泥の河」という日本映画を観た私は、そこに登場する少年が小動物を焼き殺すのを密かな楽しみとしているシーンに、遠い日の孤独で頼りな気な二人の少年の影を重ねた。人は自分がいじめられた傷みを知っている、他の人をいじめるチャンスを逃しはしないことを思って、私はただ哀しかった。

両親も兄も家を空けた日だった。何人かの子供たちが私の家に来て遊びたいと言ってきた。私に断るすべはなかったし、断りたいとも思わなかった。友達が家に来て遊んでくれることは私にとって名誉なことだったし、それに私は自分の家なら安全だろうと考えた。しかしこの防波堤は呆気なく崩されてしまった。友達はみんなで私を殴り始めた。私の腕力も精神力もとうてい彼らの敵となるどころではなかった。ちょうどそのとき、兄が帰ってきた。兄はこの光景を見て頭に血が上り、子供たちの中で一番年長の少年をしたたか打った。やがて大人たちが帰宅する頃になって、遠くであの少年が兄に叩かれたことを親に訴える涙声が聞こえてきた。しばらくして、怒号をあげながらドカドカと迫ってくる男の足音が響いたかと思うと、あの少年の父親が菜切り包丁と棍棒を手にはが家に殴り込んできた。そのとき兄はすでに隣人の手引でかくまわれていた。その隣人一家も、昔から批判を受け、いつでも逃げ出したり隠れたりできるよう準備を整えていた搾取階級の一員だったのだ。私にはもうこの世の終わりだと思われた。男は菜切り包丁と棍棒をぶんぶん振り回し、怒鳴りたてながら玄関口に仁王立ちになっていた。両親は私をぎゅっと抱きしめながら、兄が男に捕まらないようにとひたすら祈ったのである。

ある大雨の日のことだ。あの少年の家の納屋がめりめりと崩れ出した。中にいた少年を慌てて助け出しに走った父親が、胸を切り裂くような悲鳴をあげるのが聞こえた。少年はかすり傷一つ負っていないが、ショックさめやらない父親の号泣はいつまでも辺りに響き続けた。私は心に驚きを禁じえなかった。あの少年の父親であるときの彼は、なんていい人なんだろう、と。

小学校に上がってすぐに私は紅小兵に入るための申請書

を書いたが、3年生になってやっとその許可が下りた。私は許可が下りたのが一番遅いグループの一人で、最後に残った数人とともにやっと憧れの赤いスカーフを首に結べるようになった。その頃の学期末の先生の所見はいつも決まって「今後は言行一致を望む」であった。

1976年、毛沢東が亡くなった。父がそれを祖父にそつと告げたとき、祖父の顔に瞬間、ほとんど読み取れないほどの笑みが浮かんだ。私が毛主席を記念するホールに向かう列に並んでいるときだった。ちょうど向かい側の列に父がいて、それとはわからないほどの目くばせを私に送った。私はすぐにその意味するところを理解した。本当は泣きたくなくてなかったが、毛沢東の像の前に来たとき私は大きな泣き声をあげた。教室に戻るまで泣き声をあげ続けていた私は、いつ先生にバレるんじゃないかと、ずっと顔を上げられずにいた。泣き声だけはバカでかかったが一滴の涙も出ていなかったのだ。ところがいつの間にか私は本当に泣き出してしまい、最後には涙があふれてどうしようもなくなってしまった。私がどうかなりはしないかと心配して、先生が抱き起こしたときには、私の顔も襟元も袖口も涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。クラスで一番長く、激しく泣いていたので、私は賞賛をあげた。それからというもの、私は涙というものがすっかり信じられなくなってしまった。

ほどなくして祖父が亡くなった。私は、両親と祖母につれられて遺体安置所を訪れた。祖父はいつもと変わらない穏やかな表情をしていた。昨日鮎くれたその手に触れるとひんやりと冷たい。今度はその顔に触れてみると、やはりひんやりとしていたが、その優しげな様子はいつもと変わるところがないように思われた。私は泣かなかつたし、泣きたくなかつた。大人たちが涙を流しているのを見ても、何か白々しく感じられた。私は、死ぬということが、もう存在しないことだという実感ももてなかった。2、3年の歳月を経て、祖父とはもう二度と会えないことを漸く理解して、私は祖父を思って幾度も人知れず涙を流した。それからさらに年月を経て、カンヴァスに描かれた肌色の巨大なひんやりとした顔に触れたとき、それがあの日、祖父の顔に触れた感触とあまりにも似ているのに気付いて、私はどきりとした。

中国全土に湧き上がった毛沢東選集学習の波は、私の学校にも押し寄せた。最初は先生たち主導で一次一句を読み上げ解釈していたが、それではあまりにペースが遅過ぎて、ブームの高まりと生徒たちの毛沢東選集学習の意欲を満足させることはできなかった。そこでクラスでは、毛沢東選集学習進度表を作ることにした。生徒一人一人の名前の上にマス目を設け、そこに学習した毛沢東選集の文章の長さにしたがって、赤い矢印を貼るのである。矢印の伸びは最初はゆっくりだった。生徒たちはまとまった箇所を読む度に、感想やそこから何を学んだかなどを書いて翌日先生に提出し、学習した箇所に応じて矢印を貼っていた。だがそのうち、自

分で書く感想など、偉大な指導者である毛主席の書いたものに比べれば全く取るに足りず、何百の感想を書くより毛主席の著作から引用する言葉の方がよほど意義がある、と考へた頭のいい生徒たちが現われ、彼らの矢印はぐっとスピードをあげた。それがきっかけとなって、クラス全体の矢印も一気に加速することになった。矢印の高低はそのまま毛主席への敬愛と政治意識の程度を表わすことになり、進み方の早い生徒は大いに表彰された。生徒たちが写し取っていた毛沢東選集の箇所も、最も秀逸な箇所からできるだけ短い箇所へ、そしてさらにはテーマを写すだけへと変わっていった。こうして赤い矢印は飛び勢いで巨大な進度表の突端に達した。偉大な神の畢生の思想が小学生ごときに数週間で片付けられてしまい、学校側も先生たちもこの予想外の展開にただ呆気にとられるばかりだった。

小学校を卒業してすぐの休みに、私は友達とこれから入学する中学を見に行つた。すると、がらんとした運動場に、小学校時代の先生の弟が立っているではないか。彼は私たちと同年齢だった。私と友達は申し合わせたように、彼めがけて走り寄り、殴りつけ、「帰つて姉貴によく言つてけ」と捨て台詞を吐いた。少年は何故こんな目にあうのかわからず、屈辱に耐えながら目を涙でいっぱいにして去っていった。私たちは愉快でたまらなかつた。ずっといいようにされてきたが、私たちはおとなしく屈服したわけではなく、心に積もり積もつた恨みを抱えていた。私たちはそのときついに積年の恨みを晴らすことができたと感じたのである。

文革が終わつた。大勢の地主、富農、反革命、悪質分子、右派たちが名誉回復を果たした。私の家族も没収された贅沢品の返却を求めたが、貧困階級の隣人はこうのたまつた。「そんな物はもとからありませんでしたよ。私たちが言ったのははつたりだったんだから」。当時はつたりが通用したのだから、今もはつたりが通つてもいいはずではないか。だがそれ以上言い争うことはしなかつた。こちらもう疲れていたのだ。少なくとも、かつてはあんなに堂々とまかり通つていたものが、今は単なるはつたりだったということがはっきりしたのだから、それでよしとしたのだつた。

私は幸運にも中学校の美術部に入ることができ、王永生という若い先生の指導を受けることができた。その後も、張義春先生、鄭今東先生、周蝶慧先生といった素晴らしい先生方の熱心なご指導を賜つた。劉景森先生は私を河北輕工業学校の美術専修コースに採ってくれた。その後も私の歩みは順調で、栗憲庭先生と知り合つた私は全国美術展に参加し、北京中央美術学院に合格したのである。

絵画のテクニクを覚えるにつれて、私は自分の方向性を見失つてしまった。多くの芸術家を惹きつけている、唯美主義や理想主義、形式主義などへの興味は次第に薄れていった。

1988年、方向を見失つたまま、私は素描のシリーズを制

作した。

1989年の事件は、私の心に人間に対する疑いを呼び覚ました。この疑いは、少年の日に芽生えた疑いつながつて、私の中で一つになった。自分の内面にいつのまにか失われていた主題を再発見した私は、すぐにその主題の中をさまよひながら、変転きわまりない人間に向き合うことになった。私はそれにのめり込んでいった。他人を理解しようとするれば、自分を見つめずにはいられない。私も彼らの中の一人なのだから。自分というものがわからなくて、今度は他人を観察することになる。他人の中に存在する自分を見つけたくて。何かをつかんだと思つた瞬間、何もかもが曖昧になる……。私の仕事が始まつた。

(秋山珠子 訳)



## 略年譜

### 1963年

12月4日、中国河北省邯鄲市に生まれる。  
父は鉄道専門学校を卒業後、鉄道機関区幹部となる。  
母は紡績工場に勤務。

### 1966年(3歳)

出身家庭が富農であったために父は電車運転士に降格される。  
文化大革命始まる(5月)

### 1968年(5歳)

文化大革命がピークになり、富農階級であった祖父が批判闘争の対象となる。  
幼い方力鈞は祖父が首に「方地主」のプレートを下げ批判大会にかけられる姿を初めて見る。  
他の子供たちにいじめられないよう方力鈞を家に置いておこうと考えた父は、絵画道具を買い与え絵を習わせる。「紅灯記」など革命模範劇のイラストの模写を始める。  
父の行動は慎重になり、電車の運転の仕事は淡々とこなすほかは、やはり冷遇されていた二人の知識人の友人と酒を飲んだり、料理をしたりして過ごすようになる。  
家の塀には「打倒方地主」のスローガンが書かれ、子供たちは終日「打倒方地主」の叫び声をあげる。批判から逃れるため祖父に伴って原籍地、豊南県輝化村に避難する。  
文化大革命ピークに達する

ソ連型リアリズムの枠組みの中で「革命的リアリズム」と呼ばれる「毛様式(マオイストモデル)」が全盛となる

### 1971年(8歳)

学齢に達し邯鄲に戻る。邯鄲 鉄路子弟小学校に入学。  
塀に書かれた「打倒方地主」のスローガンも、子供たちの「打倒方地主」の叫び声も依然として変わることはなかった。  
父の代筆が功を奏し作文、特に搾取階級を批判する作文の成績は優秀で、たびたびクラスを代表して批判原稿を執筆する。しかし出身階級に問題のある方力鈞がそれを壇上で朗読する機会はなかった。  
紅小兵組織に加入の申請をする。  
林彪クーデター未遂事件(9月)  
中国国連復帰(10月)

### 1973年(10歳)

いつも落ちこぼれの集団にいたため劣等生とみなされるが、作文の成績がよかったため学校の「批林批孔」小組に参加する。孔子の醜態を描いた自作のショート・ストーリーが学校・幼稚園・駅の待合室などで上演される。  
「批林批孔」のために描いた絵を嘲笑され、絵画のさらなる研鑽を決意する。  
学校の美術教師が指導する美術部への入部を幾度も申請するがその都度不許可になり、やむなく他の生徒たちと美術サークルをつくる。  
この頃方力鈞に対する教師の所見は常に「今後は言行一致を望む」であった。  
批林批孔運動始まる

### 1974年(11歳)

許可を受けた最後のグループの一人として紅小兵組織に加入する。

### 1975年(12歳)

暴力事件が次第にエスカレートし、個人同士の喧嘩は日常茶飯事、ときには数百人の決闘沙汰となることも多くなる。出身が富農階級のため方力鈞は個人同士の喧嘩でも常に殴られ役であった。  
毛沢東選集学習運動がブームになる

### 1976年(13歳)

毛沢東追悼会の席上で父に暗に泣くように指示される。涙が出ないまま泣き真似をするうち、最後には溢れる涙を抑えられないほどになり、教師に賞賛される。  
祖父逝去。